に行くためのパワードスーツという設定らしい・・・・宇宙？⇒銀河！じゃあこの機体でよく

妖精瞳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『ＩＳ』は、宇宙に行くためのパワードスーツという設定らしい・・・・宇宙？⇒銀河！じゃあこの機体でよくね？・・・・

【Ｎコード】
Ｎ１４７９Ｑ

【作者名】
妖精瞳

【あらすじ】
なんか急にＩＳが書きたくなったので、
書いてみようと思った。
駄文に終わりそうな気がするががんばってみようと思う。

とりあえずＩＳの説明しとかね？

ＩＳ『Ｔａｕｂｕｒｎ（タウバーン）』

近接走行型

待機状態は、鈴のついた首輪

『ｓｔａｒ　ｓｗｏｒｄ（スターソード）』

宝石を核にした。エネルギー剣の総称

剣が展開時に持っているエネルギー量は常に一定だが、

エネルギーを加えることができる。

刀の強度、切れ味、長さはそのエネルギー量によって決まる。

この機体は、エメラルドを核とした『Ｅｍｅｒａｕｄｅ（エムロード）』

サファイアを核とした『Ｓａｐｈｉｒ（サフィール）』の二つを持つ

『ｐｉｌｅ（パイル）』

「ガンダムシリーズ」に登場する「ファンネル」のような遠隔操作

兵器。

腰に４基装備されている。

『エア・トレック』

この機体は飛ぶより、走るほうが速い

ギアがいくつかあり、その中に「玉璽（レガリア）」と呼ばれる

特殊なパーツがある。それは操縦者の技術が最高レベルのとき

それぞれの玉璽固有の魔法のような技を出すことができる。

『第四機構』
周りの熱エネルギーを吸い取り、自機のどのエネルギーにも変える
ことが
できる。
しかし、競技中の時等はリミッターがつけてあり、
「シールドエネルギー」には変えることができない。
そのエネルギーをそのまま、レーザーのようにして外に出すことも
できる。

＝＝＝＝＝＝以下、随時追加＝＝＝＝＝＝＝＝

プロローグいっとかね？（前書き）

短い上に何がしたいのかわかんねぇ！！

プロローグいっとかね？

ＩＳ学園屋上――――

夕暮れ時
一組の男女がそこにいた。
男性は柵に凭れており、女性はベンチに座り新聞を読んでいる。
「んふふ。この子が大助くんが言う織斑一夏くんね
あなたもしっかり載ってるし。」
「っるさいな。俺だって載りたくて載ったわけじゃねぇよ」
女性が笑い、男性がそれに悪態をつく

「それにしても、織斑一夏くんね。かっこいいじゃない
私、惚れちゃうかも」

「少なくとも、お前に釣り合う男には成長すると思うな～。
あいつは鈍感だから気づいちゃいないが、ライバルはいっぱいいるぜ？
この学校でも惚れる奴が増えるかもしれないし
今のうちにキープしておくのもよいと思うがな。くく」

「・・・・・・・・」
男性が冗談とわかる口調で言うと、女性は少し黙った。
女性の心情に気づかず、男性は屋上の扉へと向かう

「・・・・・・もっと強くなってくれよなぁ～
お前にはやってもらわなきゃいけないことがあるんだからさ
じゃあな。新学期に会おうや」

――バタンッ

「・・・・・・・・鈍感って・・人の事言えないくせに・・・・・・。
大助くんのば～か・・・・。」
男性が去った後、女性はそう呟いた。

導入つーか前日話を書いとかね？

時は・・数ヶ月前まで遡る

ｓｉｄｅ；ｉｃｈｉｋａ

「うー、寒っ・・・・・・」

二月の真ん中、俺は中学三年。受験のまっただ中だった。
俺が受けようと思っているのは、自宅から近い・学費が超安い・学力真ん中・学園祭が毎年あるという私立藍越学園。

昨年起きたカンニング試験のために、
なんでか四駅も離れた試験会場に行かなければならないってのが愚痴りたくなる話だ。

「いつまでも、千冬姉の世話になっているわけにもいかないしなぁ・・・・・」

年の離れた姉が養ってくれているが、長年それに引け目を感じている。
だから、中学を出てすぐ働きたかったのだが、姉の力――主に腕力――には
勝てず、現在受験生というわけだ。

この一年の猛勉強のおかげもあって模試での判定は友人とともにＡ。
普通に受ければ普通に受かるはずなので、俺はたいした緊張もなく会場に入る。

・・・・・・・・・・・・が

「えーと・・・・・・あれ？これ、どうやって二階に行くんだ？」

いかん迷った。というか、なんてわかりにくい構造をしているんだ。

設計は地域出身のデザイナーに頼んだらしいが・・・。

「しかしこの、『常識的に作らない俺カッコイイ」』的な感じはなんなんだ・・・・・・。階段は何処にあるんだよ・・・・・・」

真剣に、迷路だよと言われれば騙されるレベルだ。何でこんなにわかりにくい上に案内図がないのか。

「・・・・・・・・・・・・・・」

中学三年にもなって迷子。――――ダメだ、恥ずかしすぎる。

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は。それで大体正解なんだ」

おっと、いいところにドアが。ちょっと入り「おーい、一夏ー。」ん？

「何やってんだお前は？」

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ；ｄａｉｓｕｋｅ

試験会場の入り口で待っててても来ないから、この建物の構造上

迷ったんだろうなと思ってきてみたら、何か決意した顔でどこかの

ドアを開けようとしていた。

「何やってんだお前は？」

「大助こそ何やってんだよ」

「質問を質問で返すな。俺はお前が遅いから、迷ってるんじゃないかと

探しに来たんだが・・・・何処入ろうとしてるんだ」

「いや・・・恥ずかしながら貴方様の言うとおり迷って

しまったわけでして・・・」

「で、しらみつぶしにドアを開けようとしていたわけか」

「はい、そうでございます・・・・」

なんか一夏が小さくなってるようだが気にしない

「馬鹿が馬鹿なことしたのはまぁ良いとして・・・・

これはさすがにないぞ馬鹿。せめて馬鹿なりに周りを見ろ馬鹿。」

「五回？！なぜに一息で五回も馬鹿といわれなきゃならないんだ？！」

「そのドアの上を見てみろ」

「上？・・・『ＩＳ入学試験会場』・・・・はぁっ！」

「ん？なんだ？こんなに大きく書かれてるんだぞ？何で気づかなかったんだ？

それとも・・そんなに女子に飢えているのかお前は？

どうなんだ？ん？」

「うるせぇよ。俺だって好きに間違えたわけじゃないんだよ！！」

一夏がやけになって、叫んできた。

「一夏を弄るのはこれくらいにして。
とにかく、早く行くぞ。遅刻するからな。」
「前半が気に入らないが・・・
ああ、わかっｔ「きゃあーーー！！どいてくださいぃーー！！！！」
ぐふぅあっっ！！！？？」
――ドンッ

一夏がリヤカーに轢かれてしまった。リヤカーに積んでた荷物もリヤカーから落ちたし。
「・・って一夏、大丈夫か！？」
「ゲホッゲホッ・・・・・あぁ。なんとかな」
いよっとと言って俺の手をとって立ち上がる。

リヤカーに乗せられていたのはどこかで見たことあるような中世の鎧だった。
この建物、博物館もあるのか。今度見にこようかな。

「そちらの人も大丈夫ですかー？」
そう言いながら、リヤカーから落とされた鎧を片付けようとする一夏。
俺も片付けるか。
と、目の前にあるもう一つの鎧に手をかける。

その鎧を触った途端、キンッと金属質の音が頭に響く。
そしてすぐ、意識に直接流れ込んでくるおびただしい情報の数々。

あ、思い出した。これってＩＳじゃん。
ＩＳといえば、あいつと千冬さんや、ゲームで身に着けてるもの以外のもの
はテレビでもあんまり見ないしなー。

記憶面、情報面どちらからもこれがＩＳと理解したが、相変わらずＩＳからは
膨大な情報が流れ込んでくる。
『ＩＳ』の基本動作、操縦方法、性能、特性、現在の装備、可能な活動時間、行動範囲、センサー精度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界、ｅｔｃ・・・

それらの情報が頭に入りきり、周囲の情報が近くできるようになったとき
俺と一夏はパワードスーツに近いものを着ていた。

「へ？へ？・・・・・きゃあああぁぁぁーーーーー！！！
お、おおおお男が『ＩＳ』をつかってるうぅぅーーーー」
それを見て、ぶつかってきた女性が叫んだが、

俺は少し現実逃避をしたかった。

――――『ＩＳ（アイエス）』

正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。
しかし『製作者』の意図とは別に宇宙進出には一向に進まず、結果このスペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた――――所謂、飛行パワードスーツである。
しかしこれには致命的な欠陥があった。女にのみ使えて、

男には使えないという欠陥が・・・・・

正史とは微妙に違った展開でＩＳを手にした『織斑一夏』
そして、完全なイレギュラーである『八雲大助』
二人はこれからどのように進むのか・・・・・

導入つーか前日話を書いとかね？（後書き）

文才のなさに死にたくなる。

のほほんさんは空気清浄機だと思わねぇ？

「えー・・・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」
で――現在。

自己紹介で好奇にさらされている悪友一名
『これで終わりじゃないよね？』的な空気に押されてる模様

席が最前列の真ん中という何かの意図を感じさせるような席にいるから
注目を浴びやすいだろうな。

その点、俺は窓際族・・って、なんか違うか。

一夏は幼馴染である箒に期待の目を向けたが、目を逸らされた。
次いでこちらに目を向けてきたが、あいにく俺もフォローをする気はない。
机に突っ伏して、視線を回避する。周りがずっこけた音が聞こえたがそのまま睡魔に身を任せようとして・・・

――スパンッ

唐突に頭を叩かれた。
「っ・・・・・なにす・・・・・は？・・・」
そのとき俺はかなり間抜けな顔をしていただろう

――スパパンッ

「っぬぉぉぉぉおおおお！！！」
「目が覚めたか、馬鹿者」
「・・・・・なぜ千冬さんがここに・・？」
「はぁ、やはり聞いてなかったのか。お前は。私はここの教師だ。だから織斑先生と呼べ。」

「なん・・・だとっ・・・？！」
悪夢だ・・・・・

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ＩＳ学園ではコマ限界までＩＳ関連教育をするらしい。だから、入学式当日から普通に授業がある。

くそ、寝れると思ったのに・・・

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わって今は休み時間。
そして空気がやばい。
なにがやばいって、動物園のパンダ状態だ。別にライオンでもいいが。

ＩＳを使える男は世界中でも俺と一夏のみ＝世界的なニュースになる。
＝学園中が俺たちのことを知ってる＝学年問わず注目の的
ついでにいえば、誰が話しかけるかと牽制の声が聞こえてくる上目を向ければ、目を逸らすくせ話しかけてオーラだ。

はっきり言って、うっとうしい。

しかも、さっきまで一夏がいたのに、幼馴染である箒とどっかに消えていった

俺も幼馴染なんだから連れてけって言いたいが、馬にけられるだろうからやめておく。まぁ、ごちゃごちゃ言ったが、

ようするに一夏にいってた分の視線もきて二倍ってことだ。

――チョイチョイ

「大ちー、ひさしぶりぃー」

肩をたたかれて振り向いてみると知り合いがいた。

「・・・・・・・・・ああっ、本音じゃないか。お前も入学してたのか」

「いま大ちー、私のこと忘れてたでしょー」

「・・・・ソンナコトナイヨ？」

「ほんとぉにー？」

「すいません、少し忘れておりました」

「よろしぃー」

やっぱりこいつの空気は和むな

「とゆーか、いまだにやってんのか、お前。だぼだぼな袖」

「これはぁー私のファッションなんだよぉー」

「くく。俺にはだらしないだけに見えるがな」

「女の子にそういう事言う子はぁ、おしおきー」

――ぽむ

本音はチョップのつもりだろうが、ぜんぜん痛くない。

――キーンコーンカーンオーン

二時間目の開始のチャイムが鳴った。

「むぅー今回はこれでゆるしてあげよぉー。またねー」

本音は自分の席に戻っていった。

のほほんさんは空気清浄機だと思わねぇ？（後書き）

うわぁー
つまんねぇー
文才が欲しいです

あんまり進んでなくね？（前書き）

なんだ、このぐだぐだ感は・・・・

原作の文って何処を省略していいのかわからない。

あんまり進んでなくね？

ｓｉｄｅ；ｉｃｈｉｋａ

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。しかし、俺は全くついて行けなかった。

「・・・・・」

机に積まれた教科書の中身は、意味不明な単語の羅列にしか見えない。

（お、俺だけか？俺だけなのか？みんなわかるのか？・・・・）

ちらっと隣を見ると、頷いたりで理解しているようだった。

（ぐ・・・・。なら俺と同じ境遇の奴は・・・・）

後ろの窓際にいる大助のほうを見ると、・・・・・

舟をこいでいた。

（あいつ聞く気ねぇーーー！！）

「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

俺が後ろ向いてることに気づいた山田先生が、わざわざ訊いてきた。

大助が寝ていることには気づいてないようだ。

俺は長年一緒にいあたからわかるが、あいつは歩きながらでも寝ることができるので、傍目じゃ寝ているとはわからない。
教室の端に千冬姉がいるが、死角となっていて気づいていない。
そんな補足はさておき。
「あ、えっと」
教科書に視線を落とすが、わからん・・・
「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」
おお、たのもしい。ならば遠慮なく。
「先生！」
「はい、織斑くん！」
「ほとんど全部わかりません」
素直に自分の弱さを吐露した。

ｓｉｄｅ；ｄａｉｓｕｋｅ

・・・・今の一夏の大声で目が覚めた。
そして、あいつは馬鹿だと再認識。
あいつ電話帳と間違えて入学前の参考書捨てたもんなぁ

一夏の発言を聞いた山田先生は、困り度百パーセントの引きつった顔で
「え、えっと・・・・織斑くん以外で、今の段階でわからないって人はどれくらいいますか？」
挙手を促すが、誰も手を上げない。
「八雲くんは、ちゃんわかってますか。」

たぶん一夏と同じ境遇であるから念を入れて訊いてきたんだろう
一夏もこちらを向いてきた。
安心しろ心配無用だ。先生の話は、教科書をわかりやすく要点をまとめて言っただけなのだよ。

「大丈夫です、わかっていますよ」
一夏が裏切られたような顔をした。

「・・・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」
おお、いたのか千冬さん。死角にいたから気づかなかったよ。

「間違えて捨てました」

――パアンッ！

相変わらず音だけでも痛いとわかるような攻撃だ。
一夏への説教を俺が聞く必要はないので窓の外でも見よう

（あ、あの雲、イルカに似てる）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

きんぱつが　ちかづいてきている。
こちらに　てきいを　むけている。

対応する
眠る
→逃げる　　ピッ

というような感じで教室から逃げてきた。
見るからに高飛車な感じだったからな。
理不尽な怒りは受けたくないし。
ああいうのは一夏に任せるに限る

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者、副代表者を決めないといけないな。」
装備の特性の授業だと思ったら、千冬さんはふと思い出したように言った。

「クラス代表者、副代表者とは、まぁようするに委員長だな。
『副』とあるが、やることに違いはなく、どちらも同じ地位だ。
クラス対抗戦は、各クラスの実力推移を図るものだ。
一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。俺は興味などなく――とゆーか、やりたくないが、嫌な予感しかない。

「はいっ。織斑くんと八雲くんを推薦します！」
ほら、やっぱりな
「私もそれが良いと思います！」

「では候補者は織斑一夏と八雲大助・・・・ほかにはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺？！」
反応が遅いぞ、まぁ現実逃避でもしてたんだろうが・・

反論するつもりだろうがあきらめろ。俺はあきらめた。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも――」

――バンッ

「待ってください！納得がいきませんわ！」

先ほど、俺に敵意を持って近づいてこようとしたイギリスの金髪さんが机をたたいて立ち上がった

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか？！」

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

お前の実力がどうとかは知らないが・・・その後の・・「ぶっ！」くくくくく

「あなた、何笑っているのですか！」

「す、すまん・・っ！い、いや。イギリスも島国なのに、っ！馬鹿に仕方が『島国』って・・・・はははははは！！

つ、つぼった！・・っっ！！」

「そう言われてみれば、ねぇ」　ヒソヒソ
「うん、おかしいよね」　ヒソヒソ
俺の言葉を聴いた周りがくすくすと笑い出す。

「・・・・・く～～！！こんな屈辱初めてですわ！
あなた！決闘ですわ！！」
羞恥か怒りか両方か、顔を真っ赤にさせながら睨んできた

俺は笑いが収まったので、その発言を
「え、やだ。」
普通に断る。

「・・・・・・・」
イギリスさん―もとい、オルコットはぽかんとした顔をした
断られるのが予想外だったのだろう。
そして、オルコットが何か言おうとした瞬間。

――バンッ

音のほうを見ると千冬さんが名簿で教卓をたたいていた

「ちょうどいい。八雲、オルコット、織斑。代表者はお前ら三人で
戦って決めろ。いいな」
「いいですわね、望むところですわ」
「お、俺も？！」
即答するオルコットとは対象に、
嫌そうな顔する俺たち

「いいな！」
「「はい・・・・」」

こうして戦うことが決まってしまった。
笑いをこらえればよかった

あんまり進んでなくね？（後書き）

ここでつぼるのってやっぱりおかしい？

あれ？文短すぎじゃね？（前書き）

できるだけ本編を短くしようとしているがなかなかうまくいかない。
失敗して文自体がかなり短くなってしまった

というかタイトル考えるの早くも飽きてきた・・・

あれ？文短すぎじゃね？

ｓｉｄｅ；ｄａｉｓｕｋｅ

あれから放課後
つい千冬さんの気迫に負けて返事してしまったが
正直、戦うなんて面倒なことはしたくない。
どうするかと考えていると

「八雲くんと織斑くん。寮の部屋が決まりました。」
いつの間にか目の前にいた山田先生に部屋番号の書かれた紙とキーを渡された。俺たちは自宅から通う予定だったのだが部屋割りを無理やり変更したらしい

部屋番号は『１０３０』、一夏のほうを覗き見ると『１０２５』
このとき一人部屋だから部屋が違うんだろうと思っていた俺を殴ってやりたかった。
「あの荷物を持って来なければならないんですが
今日は帰っていいんでしょうか？」
俺がそう聞くと

「あ、荷物なら―「私が二人とも手配してやった。まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろうありがたく思え」
あ、さいですか。相変わらず大雑把なようで・・
ここでなんで俺の荷物も手配できたか聞かない。だって怖いから。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、量の一年生用食堂でとってください。そして大浴場があるのですが、八雲くんたちは今のところ使えず、各部屋にあるシャワーを使ってもらいます。」

山田先生の最後の言葉に一夏が反応したが、察した俺は
すばやく一夏の耳元で「俺たち以外、女。大浴場一つ」と言ってやる。
面倒なことは回避だ。

そうしている間に会議があるからと山田先生と千冬さんは去っていった

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「えー27・・28・・29・・30っと。ここか」
鍵を開け入る。電気をつけると・・・ベットが二つあった。
しかも奥のものは盛り上がっている。

あ、もぞもぞ動いた。
「んむぅ～～。だぁれ～？」
「・・・って本音かよ・・」
「あ、大ちーだぁ。くるのが遅いよぉ」

「ああ。それはすま、ん？・・・・・お前、俺と同じ部屋なの知ってたのか？」
「うん、そ～だよぉ。」
とゆーことは政府関連で決まったのか
ああ、もういいや。色々ありすぎて疲れた
今日は寝る。

俺は、制服のままベットに倒れこんだ。
「あ～寝るんだ。夕食はどうするのぉ？」
「さっきまで寝てたお前が言うか・・？」
「私は体内時計があるから大丈夫なんだよぉ～」
「そうかい・・・・・俺は疲れた。夕食もいらない」
「ん～～じゃあおやすみ～」
その言葉を聴いてすぐに俺の意識はやみに落ちた

あれ？文短すぎじゃね？（後書き）

なにこれ。わけがわからなくなってきた。
のほほんさんってどこまでのほほんしていいのか規準がわからない

タイトル飽きた。というわけで6話だ

森の中二つの人影が対峙していた

『追い詰めたぞ、■■■■っ。』

『いや～私の負けなのですね～』

『・・・口の減らない。何か策でもあるのか?』

『いやいや。私はもともとお遊び気分だったんですよ?』

『・・・・手加減していたとでも言うのか?』

『そう意味でもないですね～。私が勝つのも予想内、あなたが勝つのも予想内。つまり私としては、どちらが勝とうともどうでもいいんですよ。
私は満足したいためにただ遊んでいただけなのですよ。』

『遊びでっ、遊びで人を壊していたのか!?』

『はい、そうですよ。でもこれで、遊びが終わるなんていやじゃないですか
私はまだ満足していません
だから、私は・・・・・・・』

そういい人影の一つは、手のひらサイズの黒いボールを取り出す

『・・・・別の遊び場に行こうと思います。無論あなたを連れて。』

人影がそれをかざすと、周囲の空間がゆがみ始める

『この期に及んで何をするつもりだ！！』

『この■■■■■■■は■■■■。かつての使い方は■■との道を開くものです
つまり異界への道を開くもの』

『だが・・』

『そうですね、■■は先の大戦のとき私の親元である■■■■■が壊しました。』

『ならば、なぜそんなものを使おうとする！！？』

『私は言いましたよ（つまり異界への道を開くもの）、と
異界・・・つまり此処ではない別の世界
さて、どんな所に行くのでしょうね？私にもわかりませんが・・・・』

『また、向こうで遊びましょう』

そうして二つの人影が森から消えた。

＝＝＝＝＝＝＝＝

「・・・はっ」

・・・あのときの夢か・・

こっちの世界に来てから、赤ん坊になったのは驚いたが
何とか戦える身体と武器を手に入れた
だが、奴のおもちゃは見つかるが、
奴自身が見つからない。
一体何がしたいんだっ！！
「・・・んむぅ」
こぶしを握り締めているとすぐ横から女性の寝言？が聞こえた
・・・ああ、そういや本音と同じ部屋なんだったな
ん？すぐ横から（・・・・・）？
ベッドって結構離れてたよな？

ギギギ、と首を横に動かすと、目の前に本音の顔。
しかも少し動くだけでキスができそうな距離だ。
少しフリーズしたが、向こうも合わせて３０は超えているので
大人の余裕で起こさないように布団から出ようとする。
それなのになぜフリーズしたかって？精神は肉体に引っ張られるって奴だ
身体がちょうど思春期の時期なので、こう・・・な。後はさっしてくれ。
って俺は誰に説明してんだ
で、無事布団から出た俺は、制服を着たりと準備をし終えるが・・・

本音はまだ起きない。
しょうがないので、ゆすって起こすことにする
「ん～～。あと五時間～～」
「寝すぎだ馬鹿」
ぺしっと頭をはたく
「いた～い。大ちーに傷物にされた～～」
「戯言はいいから、早く着替えろ。外で待ってるから。」
そう言ってドアから出て、すぐ横の壁にもたれかける

＝＝＝＝＝

本音が着替えたら、すぐ朝食に行く。
食堂はがら～んとしてある。なぜなら、今の時刻は５：３０
うん、起きてる奴はいるにはいるだろうが、食堂に来る奴はいまい
今思えば別に本音を起こして連れて来なくても良かった。
現に横で舟をこいでいる。
「おい、せめて飯食ってから寝ろ」
「・・無理・・・朝・・早・・・食べ・・させて・・」
「はぁ・・・しゃあない。少し待て」
行儀悪いがどんぶりを掻きこむ
ちなみに俺はネギトロ丼、本音は目玉焼きとパンとその他だ
「ほれ、あーん」
「・・・あ・・ん」

俺が口元に持っていくと寝ぼけながらも食ってる
最後まで本音がシャキッとすることなく食わさせられた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
その後、朝の鍛錬、登校、授業と特筆することもなく普通に過ごした。
しいてあげるなら、先の授業でブラジャーがどうとか教室の雰囲気が気まずくなったぐらいだろう。

「織斑、放課後第３アリーナに来い。学園が用意したお前の専用機が届いた」
「へ？」
授業開始間際、千冬さんの私生活の態度を言おうとして叩かれた一夏に
千冬さんが突然そんなことを言う。

俺は知っていたので驚かない。というか当事者の一人だ。
一夏がＩＳを使えたので、すぐにあの社会不適応者の仕業かと連絡をかけたが
上手くはぐらかされてしまった。
そのときついでに一夏の専用機を作るように言った。
おそらく俺が言わなければもっと時間がかかっただろう。
それが今日届いただけだ

だが、当然おおっぴらに言うもんだから周りがざわついた。
「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」
「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで・・・・」
「ああ～。いいなぁ・・・。私も専用機ほしいなぁ」

何もわかってない一夏に耳元で教えてやると、

「な、なんとなくわかった・・・・って、あれ？
俺だけなのか。大助のは？」
その言葉にまた周りがざわつく。

「そ、そうだ。織斑君の専用機があるってことは・・・・」
「もしかすると・・・ねぇ」
そして千冬さんが俺のほうを見る。

「俺、もう持ってるぞ」
「「「「はぁ！？」」」」
ほぼクラス全体の叫び。

その後質問攻めに会うが千冬さんにあえなく皆撃沈。
質問は一つだけ答えてやった

「前から持ってたよ。ずっと（・・・）前から・・・」

それから授業が再開された

タイトル飽きた。というわけで6話だ（後書き）

大助は正確に言えば若返って異世界に来たという設定ですな
赤ん坊になった大助は孤児院で育ちました

前の世界は読んでわかるとおり現実ではありません。
前の世界はオリジナルではなく、ある漫画の世界です。

ちなみに、大助はその漫画の主人公たち、主要人物の仲間で
大助自身と夢の中の敵はその世界でもオリジナルキャラです。

敵はその世界のある種類のアイテムを使ってきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1479q/

『IS』は、宇宙に行くためのパワードスーツという設定らしい・・・・宇宙？

2011年10月7日02時22分発行